

玉音頌

松波治郎

頌音玉

昭和二十四年十月十日 初版印刷
昭和二十四年十月十五日 初版發行

定價 一六〇圓
(地方賣價 一七〇圓)

著者 松波治郎

發行者 西英作
東京都千代田區神田多町二ノ七

印刷者 永越康之
東京都板橋區板橋町十ノ二六六三

印刷所 第一印刷製本株式會社
東京都板橋區板橋町十ノ二六六三

東京都千代田區神田多町二ノ七

發行所 日本弘報社

電話神田(25)〇三九〇番
振替口座東京〇三



終戰秘録小説

玉音頌

松波治郎

前編 運命の天皇放送

後編 人間天皇宣言

目次

前編 運命の天皇放送

結婚命令 三

定石的とは 六

雨の記念日 三

自動車事故 六

二つの矛盾 三

竹槍訓練……………三

最後の電報……………三

悲痛な戦闘……………三

紅に彩る白砂……………三

疎開児童……………三

百足戦術……………三

地獄様相……………三

第一回御前會議……………三

大西中將の後ろ影……………

五五

第二回御前會議……………

五五

おゝ運命の玉音……………

五五

空襲下宮城内騒乱……………

五五

宮内大臣と内務大臣……………

一〇三

陸相阿南大將……………

一〇六

張り倒された侍従……………

一〇九

軍司令官のり込む……………

一一四

八月十五日

二七

大内山の松風

二三

心 の 行 衛

二四

後編 人間天皇宣言

虚脱の群

二七

陣痛の日々

二四

切腹群像

二四

星条旗高く

二五

消え失せた皇軍

一五四

杉山元帥夫妻

一五七

あゝ!!風流厚相

一六三

自決は續く

一六七

本土決戦の正味

一六九

遠征歸還第一陣

一七三

地獄部隊惡食部隊

一八三

ある遺骨

一八七

車内の念佛

一六

四つの遺骨

二〇

炎上した皇居

二〇

憐れな都會人

二六

いぶせき住ひ

三三

ガード下の中の中

三三

朝陽の來る窓

三七

人間天皇宣言

四一

弟宮様の語られし人間天皇……………三八

幾山河……………三四

— 終 —

多田桂一裝

日本弘報社刊

前編

運命の天皇放送

結 婚 命 令

「きさま、何枚集まつたか。」

開け放した二階の脇掛窓に腰かけた永田中尉は、ごろり、天井を向いて仰向けに寝轉んでゐる成澤中尉に聲をかけた。

青嵐が、さつ、と吹いて、下關の海が、きら／＼光つてゐた。

「うん、二十メートル（一メートルとは一枚と云ふ慣用語）ぢや。」

「相當なもんぢやのう、まあ及第點ぢや、ところで、よか奴があつたか。」

「あんまり、ぞつとせんで。」

「でもなからう、は／＼、かくすな／＼。」

「いや／＼、近頃は徴用のがれに結婚したいちうのがあるからな、うか／＼でけんわい。」

「藝妓の方がえゝかい。」

「ふん。」

あごで笑つた成澤中尉は起き直つて、

「永田、煙草よこせ。」

「よし！」

ポケットから『ほまれ』の袋を無難作に取り出して、ぽいと投げた。

「どだい、無茶ぢやな、これぢや、まるで結婚命令ぢや。」

「そうなんだから仕構があるまい。」

成澤中尉、不機嫌に、煙早の煙を、ぶかぶか吐き出し乍ら、

「種切れにならぬやうに仕込ませて置くのさ。」

永田中尉は、にこ／＼し乍ら、

「でも、これが情けぢやぞ。」

「ふん、武士の情か、きさま達、死ぬ前に女房の味つてやつを、味ははせて置いてやるぞ、つてわけか、厄介ぢやな。」

「それにしても、明日の命も判らない俺達に、よくも、お嫁さんの申込があるもんぢやな。」

「先づ、平均が二十メートル、ひどいになると、八十枚か百枚、寫眞を見せられると云ふからな。」

「すごい人氣ぢやなあ、俺達、士官校を出た時、新聞に『鳳雛』^{ほうす}と書かれたが、種がよいと見える。」

「まあ、とにかく調査が行届いてゐるから身許は大丈夫、頭腦（あたま）も悪くはなし、どうやら食つても行ける、と云ふところからちやらう。」

「理由は知らんが、近頃、もてることは事實ぢや。」

「ところで永田、貴様は、辰龍（たつりゅう）で押し通す氣か？」

「うん、だけど、故郷（こきやう）の親爺が、うるさからうと思ふ。」

「くにの親爺どころぢやない、聯隊長殿が軍司令官どのが許可すまいよ、憲兵隊の調査が嚴重だから。」

「かゝあを、憲兵に御しらべ願つての上で貰うなんて、ちよいと、いやだな。」

「親切さ、しかし、俺は死んで行くなら身輕で行きたい、五十一期から五十三期邊までの獨身者は、なるべく早く結婚しろつ、なんて、どうしても無奈だ、時機が熟さん。」

「三十一二から二十四五までの獨身將校をなくする譯さ、ほつとくと、つかひ過ぎるからな。」

「外地から、眼玉の違つたのを拾つてくると困るからちやらう。」

「何だか知らんが、氣味の悪い空氣さ。」

ところへ、どや／＼つ、と藝妓が上つて來た。

「あらつ、まだ何にも出てないわ。」